

剣の表現をめぐって 曹植を中心に

林 香 奈

鶴はじかに追われ網にかかった黄雀を見て悲しんだ少年が、鋭い剣で網を切り払い、黄雀を自由にしたことを詠う「野田黄雀行」は、曹植の代表作の一つである。その冒頭の四句にはこうある。

高樹多悲風 高樹悲風多く

海水揚其波 海水其の波を揚ぐ

利劍不在掌 利劍掌に在らずんば

結友何須多 友を結ぶに何ぞ多きを須もちいん

寓意の作とみる者はこの詩に曹植をとりまく丁儀・丁廙ら友人の死を重ね、制作時期や背景、あるいは少年や鳥、剣が意味するものを問うてきた。本論は、そうした問題をあらためて検証することを目的とするものではない。悲しげな風が吹き、大海が波しぶきをあげる不穏な歌い出しに次いで、突如現れる利劍の語。曹植は剣というモチーフをどのような意識で詩賦に用いたのか。剣をめぐる表現を見ながら、曹植の創作の一端を考えてみたい。

一、剣の表現

剣については、たとえば干将莫邪の剣（『呉越春秋』闔閭内伝）や、

呉の季札が約束を守った証として徐君の塚に欲しがっていた自らの宝剣を樹てた故事（『史記』呉太伯世家）など、古くからさまざまに記されてきた。では詩賦において剣はどのように詠まれているのだろうか。

試みに『藝文類聚』軍器部・剣の項を見みると、詩の例として鮑照詩（贈故人馬子喬詩）其六と呉均「宝剑詩」が挙げられている。次いで銘の例として、後漢の士孫瑞「劍銘」、晋の裴景声「文身劍銘」、張協「泰阿劍銘」、啓には梁の簡文帝「謝勅寶方諸劍等啓」、沈約「為東宮謝勅賜孟嘗君劍啓」が見える。刀剣に銘が多く残されるのは当然のことで、続く刀の項や、『北堂書鈔』武功部十・劍、『初学記』武部・刀を見ても、多くの刀剣の銘文が並ぶ。

銘や啓などの実用的な文が多い中で、それ以外の例としては、『藝文類聚』軍器部では先の鮑照や呉均の詩のほか、刀の項に曹植「宝刀賦」が挙げられるだけである。『北堂書鈔』武功部十・劍に引かれる剣をめぐる表現も、挙げられている作品は、宋玉「大言賦」、班固「幽通賦」、曹丕「典論」・樂府、曹植「七啓」・詩・論、傅玄「正都賦」・歌辞、陳琳・潘尼「武庫賦」（『藝文類聚』卷五十九などでは陳琳の「武軍賦」とする）の例くらいである。『初学記』の例も大差ない。

これらを見れば、劍の詩賦といえは曹丕・曹植らの建安詩人か、つづく傅玄、鮑照、呉均ということになるだろう。『藝文類聚』が鮑照を挙げるのは、鮑照の詩歌には劍がしばしば表れるからである。実際に、劍という言葉を使用している例を詩歌に限定して調べてみると、類書に名の挙がっている詩人、あるいは用例の多い詩人を挙げれば、曹丕二例、曹植八例、阮籍七例、傅玄四例、張華三例、鮑照八例、江淹十一例、沈約三例、呉均十八例となる。なお陳琳・潘尼については、「武庫（軍）賦」以外に、陳琳には「為袁紹上漢帝書」と「為袁紹檄豫州文」の二例のみ、潘尼には用例がない。こうして見ると、類書の選択は首肯できるものであること、楽府や擬古を得意とする者に劍のモチーフを使う傾向がありそうなのが窺われる。ちなみに楽府を詠まない潘岳には「西征賦」と「馬汧督誅」に劍の語が見えるのみで、詩歌には用例がないが、楽府をよくする陸機には、実際には楽府作品ではないものの詩に二例見られるのもその傾向を示しているよう。

『北堂書鈔』が示すとおり、宋玉や班固にも賦に用例は見られるが、詩賦ともに劍を詠むようになるのは後漢、特に建安以来と見てよいであろう。それはたとえば陳琳の「武軍賦」が袁紹と公孫瓚との激闘を描写したものであるように、戦乱に明け暮れた時代を反映しているからであろうし、また楽府の中には曹植の「白馬篇」や「名都篇」のように遊侠の徒を詠じるものが多いためでもであろう。

一方で、建安詩人たちには、先にも触れたとおり刀劍の銘や賦がいくつか残されており、それは戦闘ではなく刀劍そのものを詠んでいる。曹丕「露陌刀銘」、王粲「刀銘」、曹植「宝刀賦」などがそれに当たるが、

これらは曹操が建安年間に鑄造した百辟刀を息子たちに与えたことに伴って記されたものである。曹操の「百辟刀令」には「往歲 百辟刀五枚を作り、適なまたま成る。先ず一を以て五官將に与え、其の余の四は、吾が諸子中に武を好まずして文学を好む有り、將に次を以て之に与えんとす」とあるが、曹植「宝刀賦」の序には、「建安中、魏王 有司に命じて宝刀五枚を造り、龍（虎）熊鳥雀を以て識と為す、太子は一を得、余と余の弟の饒陽侯とは各おの一を得たり」とあり、これによれば、曹丕に加えて曹植・曹豹を含む他の息子たちに順に与えられたものであったことがわかる。また、曹操は曹丕のことを五官將というが、曹植は太子と記すことから、この劍は建安二十二年（二一七）冬十月に曹丕が五官中郎將から太子に任じられた際に贈られたものと見ることも可能であるが、王粲が同年春に没していることから推すに、それより以前に記されたものであろう。

曹植はこの劍について、「宝刀賦」（『藝文類聚』卷六十）で次のように記している。

有皇漢之明后、思潜達而玄通。飛文藻而博致、揚武備以禦凶。然後礪以五方之石、鑑以中黄之壤。規圓景以定環、攄神功而造像。陸斬犀革、水斷龍角。輕擊浮截、刃不織流。踰南越之巨闕、超西楚之泰阿。寔真精之攸御、永天祿而是荷。

皇いなる漢の明后有り、思いは潜かに達して玄に通ず。文藻を飛ばして博く致し、武備を揚げて以て凶を御ぐ。然る後に礪みがくに五方の石を以てし、鑑かがやかすに中黄の壤を以てす。円景を規はかりて以て環を定め、神功に攄はかりて像を造る。陸は犀革を斬り、水は龍

角を断つ。軽く撃ち浮けるがごとく截ち、刃は織流せず。南越の巨闕を踰え、西楚の泰阿を超ゆ。寔に真精の御する倏、永く天祿を是れ荷く。

曹操の文武の功が行きわたることを述べた後、刀劍の素晴らしさを称賛し、父君曹操こそが操ることのできる劍であり、劍によつて永く福祿を受けるだろうと言祝いでいる。劍の描写は具体的で、五方の石や中原の黄土で研磨された劍の切れ味を、陸では犀の革、水では龍の角を易々と、まるで劍が浮いているかのように手応えもなく、しかも刃こぼれすることもなく切り裂くのだと表現する。『藝文類聚』には見えないが、『太平御覧』には研磨の描写の前後に鍛錬や焼き入れの工程、あるいは「華紛の葳蕤なるを垂れ、翠采の澁濼たるを流す」と刀の波紋や光をも詳細に描く部分が残されている。賦である以上、描写が具体的であるのは当然ではあるが、冒頭末尾の賛辞よりも重点が置かれていると言えよう。

曹植にはこの賦のほかにも、恐らく同じ時に書かれたと思われる「宝刀銘」（『藝文類聚』巻六十）も残されている。その銘文には、

造茲寶刀、既礪既礪。匪以尚武、予身是衛。鱗角匪觸、鸞距匪蹙。茲の宝刀を造るに、既に礪き既に礪く。以て武を尚ぶに匪ず、予が身を是れ衛る。鱗角 触るるに匪ず、鸞距 蹙むに匪ず。

とある。麒麟の角や鸞の爪が争いのためにあるものではないように、劍も武を尚ぶものではないという戒めの辞が主ではあるが、同時に宝刀がさまざまな磨きをかけた鋭いものであることにも触れている。同じ時に曹操の命により献上された王粲の「刀銘」『藝文類聚』巻六十）

を見てみると、

相時陰陽、制茲利兵。和諸色劑、考諸濁清。陸剽犀兕、水截鯢鯨。君子服之、式章威靈。

時を陰陽に相、茲の利兵を制る。諸を色劑に和し、諸を濁清に考う。陸は犀兕を剽り、水は鯢鯨を截つ。君子之を服すれば、式つて威靈を章らかにす。

宝刀の制作契機・工程・鋭利さ・賛辞が二句ずつで構成されている。「利兵」は『左伝』に見える言葉であり、また先に挙げた曹植の賦にも類似表現が見える「陸剽犀兕、水截鯢鯨」は、もとは『淮南子』修務訓の「水斷龍角、陸斬犀兕」を襲ったものであるが、やはり鋭利さに言及している。

こうした表現が特徴的なものであることは、他の刀劍の銘と比較するとその違いに気づくだろう。たとえば、後漢の馮衍「刀陽銘」（『藝文類聚』巻六十）では「爾を甲兵に修め、用て不虞を戒む。危を見て命を致し、事に臨みて懼れんや。文は匿すべからず、武は黷にすべからず。文武孔だ純らにすれば、天の祿を荷けん（脩爾甲兵、用戒不虞。見危致命、臨事而懼。文不可匿、武不可黷。文武孔純、荷天之祿）」と、刀劍は不測の事態に備えるものとして、曹植の銘と同じく徒らに武を尚ぶべきではないことを述べているが、劍の状態には触れていない。「刀陰銘」にも経書に基づく賛辞が並ぶだけである。後漢の李尤「金馬書刀銘」も「巧冶して剛を鍊し、金馬 形に託す。黃文錯鏤し、兼ねて工名を勒す（巧冶鍊剛、金馬託形。黃文錯鏤、兼勒工名）」と刀を鍛え上げる工程を記すのみであるし、魏の何晏「斫猛獸刀銘」は「用

て斯の器を造り、螭獸を是れ劉す。禽を制るは允に良し、昏明亶に時し（用造斯器、螭獸是劉。制禽允良、昏明亶時）と禽獸を劍がよく斬るさまを言うが、劍自体の鋭さよりも、猛獸を斬る点に重点があるのかもしれない。

一方、曹丕には先の曹操から下賜された劍を詠んだ作は残っていないが、その二年後に自ら百辟刀を铸造している。¹⁰ その際に記したと思われる「露陌刀銘」（『藝文類聚』卷六十）には次のように記している。

於鑠良刀、胡煉亶時。譬諸麟角、靡所任茲。不逢不若、永世寶持。於鑠ける良刀、胡ぞ煉すること亶に時き。諸を麟角に譬う、茲に任す所靡し。逢わず若わず、永世に宝持せん。

鍛えあげられた輝く良刀は無用な争いをするためのものではなく、魑魅魍魎も寄せ付けぬと絶賛するが、鋭利さには触れていない。

製造工程、賛辞、戒めを主たる構成要素とするのが刀劍の銘文の常套であったことは、たとえば『大戴礼記』武王踐阼に、「劍の銘に曰く、之を帯びて以て服と為せば、動に必ず徳を行う。徳を行えば則ち興り、徳に倍げば則ち崩る」¹¹とあることや、後漢の崔駰「刀劍銘」（『北堂書鈔』卷一二二）に「欧冶 巧を運らし、鋒を鑄して鏗を成す。麟角鳳体、玉飾金錯あり」¹²とあることから推測される。曹丕の銘はこうした典型的な銘の流れを継承した作だが、曹植や王粲の銘は、刀劍である以上鋭利なのは自明だが、敢えてその要素に触れているとも言えるであろう。

後世の作を見ると、曹植らの影響を受けたと思われるものがある。例えば晋の裴逸「文身劍銘」には「器は利を以て顕らかに、実は

名を以て挙ぐ、「陸は玄犀を断ち、水は輕羽を截つ」などの鋭利さに言及している句が含まれる。¹³ また晋の張協「文身刀銘」（『藝文類聚』卷六十）には「繁文は波の廻るがごとく、流光は電の照らすがごとし（繁文波迴、流光電照）」の句があるが、刀の波紋や光をいう表現は曹植の「宝刀賦」に見られるものである。また張協「把刀銘」（『藝文類聚』卷六十）でも「裁ちて把刀を為し、利なること切玉に垂ぐ（裁爲把刀、利亞切玉）」とその鋭利さをいう。なお「切玉」は、西戎が周の穆王に献じた鍔鍔の劍が泥を切るように玉を切ったという故事（『列子』湯問）に基づく言葉である。

残存する刀劍の銘は多くはないものの、曹植以降の銘文には刀劍の具体的な様子が加えられていくのであり、曹植は銘文の書きぶりに変化をもたらしたと言える。さらに言えば、注目すべきは銘だけではない。唐代に入ると刀劍の賦が多く見られるようになるが、¹⁴ 六朝以前には賦は曹植の「宝刀賦」一作しか残っていない。してみると、銘だけでなく、賦を作っても、示したことが曹植にはあったのではないか。曹植の理解者であった王粲の銘にも類似した表現があるのも、曹植の銘に呼応して作られたためであるようにも見える。

先にも触れたが、曹操が魏王となり、建安二十二年（二一七）冬十月、曹丕が太子に選ばれる頃に「適たま成」った刀劍が、記念に曹操から兄弟に順に下賜され、この賦や銘が制作されている¹⁵。つまり兄弟にとって刀劍は特別な意味を持つ劍となった可能性がある。「宝刀賦」については、曹操の庇護のもとで得意の時期に作られた、もっぱら曹操を称賛する樂觀的で意気盛んな作とみる向きもあるが、¹⁶ 表面

上は賛辞であっても、建安十九年から二十二年にかけて繰り広げられた熾烈な後継争いを思えば、そこに曹植なりの複雑な意識を読み取ることも可能であろう。またこのことが、曹植の剣に対する意識や、詩歌におけるこだわりを生むように思われる。

二、利剣と詩歌

詩歌において剣を詠じるようになるのは後漢、特に建安以降であることは先にも触れたが、特に剣が曹植の文学の特徴の一端を示すことは、後世の詩を見ても明らかである。たとえば劉宋の鮑照「結客少年場行」(『文選』卷二十八)は曹植の「結客篇」の句を題とした作で、その冒頭の一節では、

驄馬金絡頭 あしげのうま 驄馬に金の絡頭 おもがひ

錦帶佩吳鉤 こさう 錦帯に吳鉤を佩ぶ

失意杯酒間 い 意を杯酒の間に失い

白刃起相讐 た 白刃もて起ちて相い讐う

追兵一旦至 ひか 追兵 一旦至り

負劍遠行遊 むか 劍を負いて遠く行遊す

と、呉の名刀を帯びた血気盛んな少年が刃傷沙汰を起こして逃亡する場面を描く。曹植の「結客篇」は「客を結ぶ少年場、怨に報ゆ洛北の荒(結客少年場、報怨洛北荒)」、「利剣 手中に鳴り、一撃して両尸なほ 僵る(利剣手中鳴、一撃両尸僵)」という四句を残すのみで、全貌は知り得ないが、曹植も鮑照も剣が重要な役割を果たしている。

鮑照は「吳鉤」「白刃」の語を用いて少年の相對峙する緊迫感を描く。

「吳鉤」は左思「吳都賦」(『文選』卷五)にも「吳鉤越棘」と見える呉の名刀を指す語である。「白刃」も、阮籍「詠懷詩」其二十五(『古詩紀』卷二十九)に「劍を抜きて白刃に臨み、安ぞ能く相い中傷せん(抜劍臨白刃、安能相中傷)」、傅玄「惟漢行」(『樂府詩集』卷二十七)では鴻門の会を描いて「項莊 劍を奮いて起ち、白刃何ぞ翩翩たる(項莊奮劍起、白刃何翩翩)」と詠じられる語であり、詩賦に例をもつ。

一方、相手を一瞬で仕留めるさまを描く曹植は、「利剣」が手中で「鳴」という。この「鳴」という表現は曹植の独創的な感覚を示すものであるが¹⁷、「利剣」の語も『公羊伝』や『新語』、『論衡』、あるいは枚乘「上書重諫吳王」(『文選』卷三十九)等にはすでに用例は見られるものの、詩歌に詠われるのは曹植が最初である。「利」であることを強調するほど、剣そのものだけでなく剣を手にする者の凄みが出る。曹植はわずかに二句でその威力を表現していると言つてよい。

以降の詩歌に見られる利剣の例は、この曹植の作を明らかに踏まえたものである。例えば西晋の張華「俠曲」(『藝文類聚』卷三十三)では歌の中で、

雄兒任氣俠 雄兒 氣俠を任じ

聲蓋少年場 声は蓋う少年場

借友行報怨 友と借ともに怨に報ゆるを行

殺人租市傍 人を殺す租市の傍

吳刀鳴手中 吳刀 手中に鳴り

利劍嚴秋霜 利劍 秋霜よりも厳し

騰超如電激 騰超すること電激の如く

廻旋如流光 廻旋すること流光の如し

と詠う。曹植から張華そして鮑照へと、曹植の句を如何に独自の句に作り替えようとしたかは明らかであろう。

また劉宋の袁淑「曹子建の樂府白馬篇に効う」（『文選』卷三十一）は冒頭の二句で「劍騎何ぞ翩翩たる、長安五陵の間（劍騎何翩翩、長安五陵間）」と、劍を手にして馬に跨がり軽やかに駆ける男たちを描く。この「劍騎」には李善が「史記曰く、游閑の公子なり、冠劍を飾り、車騎を連ぬ」と注を施しており、遊侠の徒を指すことが示されるが、逆に言えば史記の注を要する語ということでもある。「劍騎」の語はこの詩以前には用例がない。つまり、曹植「白馬篇」の世界を描くにあたり、冒頭に掲げるに相応しい語として生み出されたと言えるのかもしれない。

曹植の「白馬篇」（『文選』卷二十七）は「白馬 金羈を飾り、連翩として西北に馳す。借問す誰が家の子ぞ、幽并の遊侠兒（白馬飾金羈、連翩西北馳。借問誰家子、幽并遊侠兒）」という句で始まり、白馬には跨がるものの劍は出てこない。続いて良弓を使いこなして名を挙げたことを述べ、ようやく劍が現れるのは、後半の辺境のとりでに赴き、「軀を棄てて国難に赴き、死を視ること忽ちに帰するが如し」という結句にあるように、国難に際し自らの命を兵刃の間に棄てようという覚悟を詠じる部分である。

邊城多警急 辺城 警急多し

胡虜數遷移 胡虜 數しば遷移す

羽檄從北來 羽檄 北從り來り

厲馬登高隄 馬を厲まして高隄に登る

長驅蹈匈奴 長驅して匈奴を蹈み

左顧陵鮮卑 左顧して鮮卑を陵がんで

棄身鋒刃端 身を鋒刃の端に棄て

性命安可懷 性命 安んぞ懷うべけんや

父母且不顧 父母すら且つ顧みず

何言子與妻 何ぞ子と妻とを言わん

「鋒刃」は鋭い刃先を言い、『尚書』費誓に由来する、よく見る言葉のように思われるが、王粲「羽獵賦」、潘岳「西征賦」、鮑照「尺蠖賦」、また庾信「樊噲見項王讚」などの賦や文には見えない。詩歌においては唐以前では、曹植にしか用例が見いだせない。「棄身鋒刃端」の前後の句は辺境の情勢や自らの心情を言うものであつて、戦場の本当の厳しさは「鋒刃」の一語に凝縮されていると言つてよい。

袁淑の作は「劍騎」という語で曹植の描く遊侠の士を再現してはいるが、「遊侠一般の気概をうたう」¹⁸ものであり、「義分 霜よりも明らかに、信行 直なること弦の如し（義分明於霜、信行直如弦）」、「一朝人に諾するを許さば、何ぞ能く坐ながらにして相い捐てん（一朝許人諾、何能坐相捐）」と、都に参集する男だての信義の厚さには辞を尽くしても、曹植の作に感じる実際に身に迫るような感覚には欠けるところがある。

それに対し、同じく曹植の「白馬篇」を模擬した鮑照の「代陳思王白馬篇」（『樂府詩集』卷六十三）は「白馬に角弓を駢え、鞭を鳴らして北風に乗る（白馬駢角弓、鳴鞭乘北風）」の二句で始まり、辺境の

地に起き手柄を立てんことを述べる。劍の語こそ用いられないが、吹きすさぶ「風」、その中に「鳴」る鞭声という曹植に特徴的な要素によって辺境の厳しさを伝えている。

曹植には眼前の事物や情景をそのまま表す言葉を単に並べるのではなく、その特性や本質を捉えるよう表現を工夫して、読み手が肌で感じることができるような感覚に誘うところがある¹⁹。西晋の傅玄「秦女休行」(『樂府詩集』卷六十一)に見える「匿劍 白刃を藏し、一たび奮えば尋に身僵る。身首 之が為に処を異にし、伏尸 肆旁に列ぬ(匿劍藏白刃、一奮尋身僵。身首爲之異處。伏尸列肆旁)」といった表現は、曹植「結客篇」の影響を受けたものであろうし、女だてらに家族の仇討ちを果たす秦女休の鬼気迫る迫力を、隠し刀の白い光で示す手法は、曹植文学の特質に通じるものと言えるだろう。傅玄や鮑照は、曹植のそうした特徴をより正確に捉えて、自らの作品に活かしている。もちろん曹植にも劍をめぐる常套表現は多々見られるのであって、すべての表現がそうなのではない。たとえば、「名都篇」(『文選』卷二十七)では「宝劍は直千金、被服は光やき且つ鮮やか(寶劍直千金、被服光且鮮)」という。李善が「論衡に曰く、世は利劍に千金の価ありと称す(論衡曰、世稱利劍有千金之價)」と注するように利劍こそ宝劍だが、洛陽の華やかさを詠うこの歌では少年の帯びる劍を利劍とは言わずに宝劍と表現する。同じ「宝劍」の語でも「贈丁儀」(『文選』卷二十四)では「延陵子を思慕す、宝劍は惜しむ所に非ず(思慕延陵子、寶劍非所惜)」と、延陵季札が信義の証に徐君の墓に宝劍を樹てた故事を重ねる。また、「雜詩」其六(『文選』卷二十九)では「劍を拊し

て西南を望み、泰山に赴かんと欲するを思う(拊劍望西南、思欲赴泰山)」といい、先の「白馬篇」に通ずるような国難に赴かんとする志を示しつつ、劍に手をかけてその機の到来を待ち望む。自らの高い志や抱負を述べる「鰕鮪篇」(『樂府詩集』卷三十)でも「劍を撫して雷

音あり、猛氣縦横に浮く(撫劍而雷音、猛氣縦横浮)」と劍に手をかけるが、国に報いようとする勇猛な気が溢れんばかりで、劍に触れただけで雷のような音が鳴るとする。なお、この表現は『莊子』説劍に基づいている。趙の恵文王が多くの劍士を犠牲にしても劍術を愛好してやまぬために、莊子が天子・諸侯・庶人を三種の劍に喩えて、王の愛好する庶人の劍術は無益であるとたしなめたという故事である。諸侯の劍の一節に「諸侯の劍は、知勇の士を以て鋒と為し、清廉の士を以て鏑と為し、……此の劍一たび用うれば、雷霆の震うが如し。四封の内、賓服して君命に聽従せざる者無し」²⁰とあるのに拠る。「鰕鮪篇」は明帝太和年間の作とみられており、この作は諸侯としての気概を専らいうものだろう。ただ、莊子のことをさらに変えて、劍を用いる前から猛氣に反応して劍が雷音を放つという表現は、「利劍手中鳴」という「結客篇」の句を想起させるものがあり、曹植が劍の表現には一貫してこだわりを持っていたことが想像される。

こうして銘や賦、あるいは詩歌を見てくると、曹植は他の詩人たちと同様に刀劍を友情や志、信義を示す常套句で表現することもあるが、一方で劍の持つ「利」という特性にしばしば注目していることが窺われる。それは劍が天下を服するものの象徴であり、容易に人の命を奪うものでもあり、その力を常に恐れればこそであったかもしれない。

ここでさらに付け加えれば、曹植「結客篇」の「利劍手中に鳴る」やその作品の影響を受けた張華「俠曲」の「利劍は秋霜より厳し」の句は、いずれも曹丕の「大牆上高行」(『楽府詩集』卷三十九)に見える句との関わりが指摘できる。曹丕の作は隠士に出仕を促すために、衣服や女樂などの華麗さを次々と提示する内容だが、その中に宝劍を持つことの喜びを述べる一節がある。

帶我寶劍、今爾何爲自低印。悲麗平壯觀、白如積雪、利若秋霜。

我が宝劍を帯ぶるに、今爾は何為ぞ自ら低印す。麗平なる壯觀を悲れむ、白きこと積雪の如く、利きこと秋霜の如し。

なおこれには異文があり、西晋の張協「七命」(『文選』卷三十五)にやはり劍について「光は散電の如く、質は耀雪の如し(光如散電、質如耀雪)」と表現する句があるが、李善はそこに先の『莊子』説劍の一節とともに「魏文帝大牆上高行曰、我帶長寶劍、光白如積雪也」という注を施している。つまり、張協は宝劍の白い雪のような光の表現を継承しているが、先の張華の句は秋の霜のごとき鋭さに着目して曹丕の表現を襲っているのである。なお、張協「七命」には獣の恐ろしい姿を描いた「口は霜刃を齧み、足は飛鋒を撥す(口齧霜刃、足撥飛鋒)」という句も見え、ここでは刃を霜に喩えている。

また「大牆上高行」に見える「今爾何爲自低印」の句は、劍を帯びると勝手に劍が上下に揺れるさまをいうが、これは曹植の「利劍手中に鳴る」に通ずる表現と言つてよいであろう。この句に類似した表現に、曹丕「於謙作詩」(『古詩紀』卷十二)の「羅縷風に從いて飛び、長劍自ら低昂す(羅縷從風飛、長劍自低昂)」の句がある。華やかな

宴に酒と肴、弦歌や雅舞が揃い、酒を酌み交わす中で、薄絹の冠の紐が風に揺れ、劍が自ずと上下するという。その直前には「余音迅節に赴き、慷慨して時に激揚す(餘音赴迅節、慷慨時激揚)」とあり、歌舞に高揚した気持ちに自ずと伝わるさまを表現したものであろう。なおこの詩は、建安七年(二〇二)曹操が謙に駐屯した際の、曹丕十六歳の作と見られており、冒頭に挙げた曹植「宝刀賦」よりも早い時期の作である。

さらに『北堂書鈔』卷一二二には曹丕の歌辞として、「越民宝劍を鑄し、匣より出でて寒芒を吐く。之を服して左右を禦し、凶を除き福祥を致す(越民鑄寶劍、出匣吐寒芒。服之禦左右、除凶致福祥)」という四句が残されている。遼欽立は後半の二句を「大牆上高行」の異文としているので、あるいは前半の二句も同様と見ることも可能かもしれないが、詳細は不明である。いずれにせよ、前半の二句には「寒芒」という劍のぞつとするような冷たい光をいう表現が見えている。こうした例を見ると、曹植の利劍にまつわる表現は、曹丕に通じる、あるいはそれを意識したものであると考えることができるかもしれない。「大牆上高行」の制作時期は不明だが、隠士に出仕を求める内容という点では、曹植の「七啓」(『文選』卷三十四)に通じるものがある。特に鏡機子が玄機子に対し、この世の楽しみとして美酒美食に続いて説くのが宝劍の素晴らしさであるが、その「七啓」の一節には、

歩光之劍、華藻繁縟。飾以文犀、彫以翠綠。綴以驪龍之珠、錯以荆山之玉。陸斷犀象、未足稱雋。隨波截鴻、水不漸刃。

歩光の劍、華藻繁縟なり。飾るに文犀を以てし、彫るに翠綠を

以てす。綴るに驪龍の珠を以てし、錯うるに荆山の玉を以てす。陸に犀象を断つも、未だ雋と称するに足らず。波に随いて鴻を截つも、水は刃を漸さず。

とあり、「宝刀賦」に近い表現で劍の鋭さをいう。「七啓」は建安十五年（二一〇）に曹操が「求賢令」を出した際に、それに応じて制作したものと見るのが通説であり、似た内容を持つ曹丕の「大牆上高行」もその時期の作とすれば、その翌年には曹植は二十歳で平原侯に、曹丕は二十五歳で五官中郎将、副丞相となり、両者の差が生じ始めることになる。「七啓」も「大牆上高行」も、さらには類似した表現をもつ「於譙作詩」も、両者の争いが顕在化する前の、それぞれが得意になって文才を誇った作とも言えるだろう。

その数年後、雌雄を決して後にわざわざ銘に加えて「宝刀賦」を曹植が詠んだのは、やはり単に曹操に対する賛辞を伝えるためだけではなかったのではないか。たとえば「贈丁儀」の詩で徐君の墓に宝劍を樹てた季札に自らを重ねたように、劍にまつわるさまざまな歴史故事と絡めながら詠じる作もあるが、そうした手法とは関わりなく鋭い劍を詩賦に詠じることは、利劍を持つこと、あるいは持つ者への曹植自身への思いを述べることでもあって、劍をめぐる表現上のこだわりは、曹丕との対立や両者の差が広がっていく中で生まれてきたものと言えるかもしれない。

三、劍と批評

先に挙げた『莊子』説命にみえる「諸侯の劍は、知勇の士を以て鋒

と為す」ということばに象徴されるように、刀劍の鋭さは勇猛さと同時に知恵や俊敏さと結びつく。たとえば『尚書』周書・周官に「利口を以て厥の官を乱すこと無かれ（無以利口亂厥官）」とし、まさしく曹植を評して「植は常に自ら利器を抱くも施す所無きを憤怒す（植常自憤怒抱利器而無所施）」（『三国志』陳思王植伝）とするのは、人のすぐれた才能や巧妙な言辞を評した謂いである。

それをさらに詩文を批評することばとしても用いるようになるのが、曹植ら建安詩人たちである。陳琳が曹植に宛てた書簡「答東阿王牋」（『文選』卷四十）にはこうある。

昨加恩辱命、并示龜賦。披覽粲然。君侯體高世之才、秉青萍干將之器、拂鐘無聲、應機立斷。此乃天然異稟、非鑽仰者所庶幾也。音義既遠、清辭妙句、焱絕煥炳。

過日はありますがたくもお手紙を頂戴し、併せて「龜賦」もお示しくださいました。拝見しましたところ、素晴らしい作品でした。あなた様は卓越した才能をお備えになり、青萍や干將の劍のようになすぐれた才能を身に受けられ、干將・莫邪の劍のように鐘を撃つても音をたてることもなく、機に応じて立ちどころに断ち切るどころがおあります。これは天性の、人とは異なる才能であって、仰ぎ慕っても望めるものではありません。（『龜賦』は）音も内容も深遠で、清らかなことばや優れた句は、燃えさかる炎のように輝いております。

古代より名劍として知られる青萍・干將の劍の「器」に曹植をなぞらえること、そしてまた特にその言葉が最上級の賛辞となるためには、

曹植自身がその鋭利さに価値を置いていることが前提となるであろうし、利剣を文才に当てる表現が陳腐でなければなお効果的であろう。実際に、音も立てずに物を切り裂く鋭さは、表現こそ異なるが、曹植が「宝刀賦」に力をこめて描いたさまに重なるところがあり、文才を評した用法としては最も早いものと思われる。

東阿王に曹植が封ぜられるのは明帝の太和三年（二二九）のことであるが、陳琳は建安二十二年（二一七）に没しているため、それ以前に書かれた書簡だと思われる。文中の「亀賦」は「神亀賦」（『藝文類聚』卷九十六）であるとされており、亀は千歳の寿命を持つとされるのに、数日で死んだことを悲しんで詠じたものである旨が序に記されている。その一節には、

歩容趾以俯仰、時鸞廻而鶴顧。懼沉泥之逢殆、赴芳蓮以巢居。のろのろと歩み、首を上げ下げし、時には首をめぐらして遠くを眺め見る。泥の中に沈んでいると危うい目に遭うのではないかと懼れ、蓮の葉のあたりに行つて身を落ち着かせる。

といった内容を含んでおり、自らの不安な境遇を重ねた辞とも受け取ることが出来る。後継争いが激しくなっている頃の作で、清妙な字句に含まれる深遠な内容を綴る曹植の筆を陳琳は称えているのである。

また曹植には楊修にあてた書簡「與楊徳祖書」（『文選』卷四十二）があるが、この中でも剣で才能を表現している。劉季緒なる人物の不当な批評に対する憤りを述べた一節には、次のように見える。

蓋有南威之容、乃可以論其淑媛。有龍泉之利、乃可以議其斷割。

劉季緒才不能逮於作者、而好詆訶文章、掎摭利病。

思うに、晋の美女である南威ほどの器量があつてはじめて女性の美を論ずることができるのであり、宝剣とされる龍泉のごとき鋭利さがあつてはじめて刀剣の切れ味を議論することができるのである。劉季緒の才能は作者に及ぶべくもないのに、好んで他人の文章をそしり、その優劣を非難する。

宝剣の器を文才や批評の資格になぞらえており、かつ曹植自身がこの書簡で他人の文章を批評している以上、宝剣の器と自負していることは明らかである。この書簡を併せ見ると、陳琳の賛辞も曹植という人物を捉えたものであつたことが窺われよう。

この書簡の冒頭に「僕少小にして好んで文章を為す、今に至る迄、二十有五年なり（僕少小好爲文章、迄至于今、二十有五年矣）」とあることから、これは建安二十一年（二一六）、曹植二十五歳の作とみられる。とすれば、先の陳琳との書簡もこの楊修との書簡も、建安二十一年、二十二年あたりの、曹丕が太子に決まる直前、さらには「宝刀賦」などが詠まれた時期と重なってくることになる。

作品は現存していないものの、刀剣が下賜されれば、曹植や王粲のように他の詩人たちも剣にまつわる議論や創作をしたかもしれない。また『文士伝』（『藝文類聚』卷六十）には、

魏文帝愛楊脩才、脩誅後、追憶脩。脩曾以寶劍與文帝。文帝後佩之、告左右曰、此楊脩劍也。

魏の文帝曹丕は楊脩の才能を愛し、楊脩が誅殺されて後、楊脩のことを追憶した。楊脩はかつて宝剣を文帝に与えたことがあり、

文帝は後に之を帯びて左右の者に、これは楊脩の劍だと語った。という曹丕の逸話が残されており、才能を偲んで宝劍を帯びたのは、劍が才と結びつくものであるからこそであろう。そのように考えると、実際に利劍を持たなかった曹植が、代わりに手にした文才という利劍にこだわるのも当然であり、かつ作品の中で劍の表現に他の詩人とは異なる詠じ方をしていることも理解できよう。

なお、この文学と劍の表現はその後の文学批評にも影響を与えている。たとえば劉勰の『文心雕龍』にはいくつかその例が確認できる。文才そのものを劍に喩えたものとしては、「神思」章には「若夫駿發之士、心總要術、敏在慮前、應機立斷、覃思之人、情饒岐路、鑒在疑後、研慮方定（筆の速い人は、心に創作に必要なすべを把握しており、考える前に敏速に筆を走らせ、機に依じて立ちどころに書き上げる。長考する人は、感情がさまざまに移り、疑い迷った後に考えが明らかとなり、熟考して初めて考えが決まる）」という。「應機立斷」の語は、明らかに陳琳の書簡にある曹植の才を踏まえた用法であろう。また「銘箴」章では「魏の文帝の九宝の銘は、器物（刀劍）は銳利だが文辞は鈍である（魏文九寶、器利辭鈍）」とあり、措辞のよしあしを利鈍で評価している。

文才そのものを劍で示す例ではないが、「知音」章では、「凡操千曲而後曉聲、觀千劍而後識器。故圓照之象、務先博觀（凡そ千曲を演奏して後に音楽が理解でき、千劍を目にして後に器物（劍）の何たるかを識る。ゆえに文学を完全に理解するためには、まずは広く作品を読むことに務めるのである）」として、鑑賞批評能力の養成には博覧が

肝要と述べている。似た議論は曹植以前の漢の桓譚にも見えており²¹、賦と劍が対比される形で運用能力の養成法が示されている。「奏啓」章では、「筆は干将より鋭く、墨は淳醜を含む（筆銳干将、墨含淳醜）」と、筆墨が名刀や鳩毒より威力を発することをいう。これらは曹植らの表現を直接継承したものではないが、文武の才を対比するものとして、文章と劍が示されている。この点から見ても、武のみを閉ざされた曹植の文と劍への執着が推察されよう。

結びにかえて

最後に、曹植は利劍そのものを詩題とすることはなかったが、時代が降って唐の韓愈には「利劍詩」と題する珍しい作品が残っている。

利劍光耿耿 利劍は光耿耿たり

佩之使我無邪心 之を佩ぶれば我をして邪心無からしむ

故人念我寡徒侶 故人 我の徒侶に寡しきを念い

持用贈我比知音 持して用って我に贈りて知音に比す

我心如冰劍如雪 我が心は氷の如く劍は雪の如し

不能刺讒夫 讒夫を刺す能わず

使我心腐劍鋒折 我が心をして腐らしめ劍鋒をして折れしむ

決雲中斷開青天 雲を決し中斷して青天を開き

噫劍與我俱變化歸黃泉 噫 劍と我と俱に変化して黄泉に帰せん

「徒侶」は仲間のことであり、孤独な作者に友人が知己とすべしと劍を贈ってくれたものの、讒言する輩を殺すこともできずに、心を腐らせるばかりだと歎く。

韓愈が自身を語ったことはでありながら、十分に曹植を想起させる内容を持っている。曹丕の詩句を踏まえた「雪のような剣」に対比されるのは氷のような作者の心であり、利剣を掌中におさめてもなお己を脅かすものを払うことはできないのである。想像をたくましくすれば、「利剣」以外は一つも曹植の詩語を用いていないけれども、実際は「野田黄雀行」にひそかに応えた詩といえることができるかもしれない。また、そうであるとするれば、剣というモチーフの詩歌における採り上げ方はさまざまある中で、「利剣」という語は曹植を象徴することばであることを示しているであろう。

1 『北堂書鈔』卷二二二には、上述のとおり、宋玉や班固の賦もみえる。「宋玉大言賦云、方地爲車、圓天爲蓋、長劔耿介、倚天外。」また「班固幽通賦序云、衛靈公太子蒯聵、好帶劔、長一丈。公諫乃作、短者長一尺。公知不可以傳國、乃逐之。」

2 邊欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三）による。

3 『太平御覽』卷三四四兵部七十五劔下には、曹植に先んずる作として、「古詩曰、腰中鹿盧劔、可直千萬餘」、「又曰、何意百鍊鋼、化爲繞指柔」、「班固詩、寶劔直千金」、「又曰延陵輕寶劔」以上四首を挙げており、後漢には劔の故事が詠まれていたことが窺われる。いずれも断片で全容は判らないが、延陵季札の劔や鹿盧劔など、古劔や歴史故事を詠んだ詩と思われる。なお班固の「延陵輕寶劔」の句は、江淹「雜體詩」（『文選』卷三十一）の「陳思王・贈友」に同じ句が見える。

4 『藝文類聚』卷六十。「往歲作百辟刀五枚、適成。先以一與五官將、其餘四、吾諸子中有不好武而好文學、將以次與之。」

5 『藝文類聚』卷六十。「建安中、魏王命有司造寶刀五枚、以龍（虎）熊鳥雀爲識、太子得一、余及余弟饒陽侯各得一焉。」なお、「虎」字は『太平御覽』卷三四六により補った。また『御覽』は「鳥」を「馬」に作る。

6 朱緒曾『曹集考異』卷三および『曹集詮評』卷二では、『北堂書鈔』に拠るとして、「故其利、陸斬犀革、水斷龍角」としており、趙幼文『曹植集校注』もそれに倣って本文を改めている。但し、『北堂書鈔』卷一二三（清、孔廣陶校本）には「故其」とはあるが、「利」の字はない。明、陳禹謨補注本には「故其」もない。

7 『太平御覽』卷三四六。「乃熾火炎爐、融鉄挺英。烏獲奮椎、歐冶是營。扇景風以激氣、飛光鑑於天庭。爰告祠於太乙、乃感夢而通靈。然後礪以五方之石、鑿以中黃之壤。規員景以定環、據神思而造像。垂華紛之葳蕤、流翠采之混漾。」

8 この他にも『史記』蘇秦列伝に「陸斷牛馬、水截鵠鷹」、『漢書』漢王褒伝および『文選』卷四十七王褒「聖主得賢臣頌」に「水斷蛟龍、陸斬犀革」などの類似表現が見られる。

9 『藝文類聚』卷六十。「又刀陰銘曰、温温穆穆、配天之威。苗裔無疆、福報永綏。」

10 『藝文類聚』卷六十、曹丕『典論』に「建安二十四年二月壬午、魏太子丕造百辟寶劔。」

11 「劔之銘曰、帶之以爲服、動必行德。行德則興、倍德則崩。」

12 「歐冶運巧、鑄鋒成鍔。麟角鳳體、玉飾金錯。」欧冶は春秋時代の名工。

13 『藝文類聚』卷六十。「晉裴景聲文身劍銘曰、器以利顯、實以名舉。

長劍耿介、體文經武。陸斷玄犀、水截輕羽。九功斯象、七德是輔。」

14 『歷代賦彙』卷八十六器用には、曹植「寶刀賦」に次いで、唐の

利君「天子劍賦」、達奚珣「劍賦」、「古劍賦」、「豐城寶劍賦」、闕名

「歐冶子鑄劍賦」、「秦客相劍賦」、「刺鐘無聲賦」、白行簡「金躍求爲

鏤鈇賦」、獨孤授「斬蛟奪寶劍賦」、徐寅「斬蛇劍賦」、宋言「漁父

辭劍賦」、王起「延陵季子挂劍賦」、「斗間見劍氣賦」、「切玉劍賦」、

陳章「斗牛間有紫氣賦」、韋肇「金劍出匣賦」、金厚載「昆吾切玉劍賦」、

賈餗「太阿如秋水賦」、宋の陸游「豐城劍賦」、元の楊維禎「斬蛇劍賦」、

明の宋存標「舞劍賦」を挙げる。また卷八十八器用には唐の梁洽「金

剪刀賦」が見える。

15 徐公持『曹植年譜考証』(社会科学文献出版社、二〇一六)では、『太

平御覽』卷三四六所引の「宝刀賦」の序文に、「造宝刀五枚」の後

に「三年乃就」の一文があることに基づいて、建安二十四年(二一九)

の作とする。但し、その年には王粲がすでに没しているため、建安

二十二年とするのが妥当であろう。

16 曹海東注訳・蕭麗華校閲『新訳曹子建集』(三民書局、二〇〇三)。

傅重庶注訳『三曹詩文全集訳注』(吉林文史出版社、一九九七)も

父の期待に恥じぬよう、自ら功を立て国家に裨益したい旨を述べる

作とみている。

17 拙稿「曹植の「罪」とことば」(『未名』三四、二〇一六)。なお、『後

漢書』臧宮伝に「臧宮、馬武之徒、撫鳴劍而抵掌、志馳於伊吾之北矣」とあり、李賢は「鳴劍」の語に「曹植結交篇曰、利劍鳴手中」と注

しており、ここからも曹植に特徴的な表現であることが窺われる。

18 川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹

訳注『文選』第六冊(岩波書店、二〇一九)、二四六頁。

19 拙稿「風」と「光」をめぐって 曹植を中心に」(『未名』

一四、一九九六)および「愁いと賦 曹植を中心に」(『京都府立大

学学術報告』六九、二〇一七)。

20 『莊子』説命。「諸侯之劍、以知勇士爲鋒、以清廉士爲鍔、……此

劍一用、如雷霆之震也。四封之内、無不賔服而聽從君命者矣。」

21 漢の桓譚「新論」(唐、馬總『意林』卷三所収)に「揚子雲工於賦、

王君大習兵器。余欲從二子學、子雲曰、能讀千賦則善賦。君大曰、

能觀千劍則曉劍。嗚曰、伏習象神巧者、不過習者之門」とある。

(二〇二二年十月一日受理)

(はやし かな 文学部日本・中国文学科教授)